

あを 11

2009





何遠之有 保多孝三著『柞廬印存』(一) より

論語・子罕第九「唐棣之華。偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰。未之思也夫。何遠之有。」

(訳) 詩に、にわうめの花びら、ひらひらとひるがえる。とわに変わらぬわが思い、汝の室に届くまじ、あまりに道の遠ければ、とあり。子曰く、その思いはまだ本当の思いではない。道が遠くて届かぬようでは。

このやうな訳で読むと論語のイメージが変わる。曲線の美しい作品である。

あを

十 一 月



夏れうり

本町三 佐藤喜孝

白を食し翠のこりし夏れうり
ヤキトリ屋出て来たやうに黒揚羽
秋の晝障子の框背に痛し
ゲヂゲヂがゲヂゲヂとゐる秋深み
重き^{をぢさん逝く}もの思ひ出 秋の雨

異次元

清瀬 赤座典子

表参道バギーの多し秋澄みて
五十二階秋の金魚が乱舞する
向合へる東京タワー秋の綺羅
萩揺れる坂は変らぬ麻布かな
異次元に二日の後の虫の声

聖蹟桜ヶ丘 安部 里子

秋暑しラベルのボレロ点滴に
卓囲むおしゃべり男法師蟬
うつうつと無意識の闇秋の暮
朗読会打上げ出づる土瓶蒸
秋の蟬ソロで鳴けるはおそ生れ

曳 舟 遠 藤 実

大地まで身を震はせて落葉の虚
曼珠沙華まだ夏帽子手離さず
無花果や人には云へぬ昔あり
合掌の美しき人秋の空
秋の海なぜか心を静かにす



何もせぬ間に九月逃げてゆき
夏逝かす旅にも出ずに瓜を切る
枕木にやすむ秋蝶陽に染むる
今日からは膳に供さる新豆腐
鮎食うべ指の香れり川の音

逗子 鎌倉喜久恵

菊日和

初孫や初祖父祖母の菊日和
敬老といふおもはゆき菊日和
ひらかなでさらにやさしく秋の草
新米や朱鷺舞ふ里のコシヒカリ
点点点脇に徹して吾亦紅

川崎・小田原 木村茂登子



秋暑しリレンザタミフルおまじなひ
白木槿きちんとたたみ散りにけり
抜け出でて萩のトンネル振り返る
ゆったりと道よぎる猫秋の蟬
夕餉時の銀座にトンボ迷ひ込む

京 橋 篠田 純子



駅舎には駅員ひとりカンナ燃ゆ
遠き日の月を重ねてけふの月
丁寧な間違ひ電話夜の秋
よき空でありしひと日や鰯雲
観覧車秋の夜空を回りをる

千 駄 木 芝 尚子



秋草を寄せ植糸にして美人果舗
 前山の中腹白し夾竹桃
 言の葉の届かぬ黄泉へ曼珠沙華
 言葉なく行き交ふ秋の地下ホーム
 かかはりなく時過ぎゆくや白粉花

宝仙寺前

芝宮須磨子

踊り唄

静かなる袋の中や蝮捕り
 電柱の立ちつくしけり大西日
 夏の風邪トタンの庇角尖り
 遮断機や柝車を堰きて雲の峰
 踊り唄石屋にとどきもう寝しや

劔地東出つるぎのちひがしで

定梶じよう

✽

玉原の木道行けば草紅葉
薄紅葉スキーゲレンデ過り行く
南極の映画楽しむ秋暑し
虫の声近くに聞いて髪染める
苦瓜や隣の塀で元気なり

所 沢 須賀敏子

✽

狭い道更に狭くし風の萩
病む人と半分にして梨を食べ
薄薄と黄の兆しをる青蜜柑
里祭神馬のうしろ神輿ゆく
田水掛合ひ人も神輿も泥塗れ

宝仙寺前 鈴木多枝子

十三夜

浦和 竹内弘子

新涼や左眼かわきはじめけり
秋澄むや蕎麦のせいろを井桁に積み
黒眼がちなりし飼犬十三夜
採血のあとの青染みさるすべり
秋口や中山道をあるく会

わが影の

田端 田中藤穂

言海のずしりと重し秋めきぬ
東京に古墳いくつも曼珠沙華
わが影の老人歩き秋日傘
秋のセールしきりに母の恋しき日
源氏読む顔に秋蚊のまつはれり

三井寺

三光坂東亜未

秋うらら微塵切から家事はじめ
言ひたきを口尖らせてをみなめし
鰯雲黙してをりぬ屋根瓦
三井寺尚子さん素謡会にて三井寺のシテ謡ふやシテの今日の日秋気満つ
秋日和葺替終へる檜皮葺

半日を漁網繕ふ秋うらら
秋うららいびつな野菜戴きて
秋うららお洒落な衣服髪容
無花果の木に寄る物やみな肥ゆる
交通整理の紅白の旗櫨紅葉

富田長崎桂子

曼珠沙華

大 官 早崎泰江

遊美園とふ老人ホーム鶏頭咲く
土地よぎる単線電車いわし雲
立ち尽す枯れひまはりの頭垂る
小学校フェンスが稲架となりけり
竹林の奥深きかな曼珠沙華



町 屋 藤野寿子

敬老日国歌斉唱すらすらと
敬老日交通安全マスメディア
早稲も刈る三味線も合奏高校生
あるけあるけ肥満肥満敬老日
都電待つ列さんざめき敬老日
硯洗前号正誤ふ面相小筆ねむごろに

秋

政談に耳貸してみる秋ついで
胸に挿すバースデイなる秋のバラ
秋の夜夫の愛せし伝記読む
次々と不快指数の竝ぶ秋
秩父路や邯鄲の声逃すまじ

中
井
森山のりこ

＊

柔肌の河馬の口中天高し
遠ざかる鈴音かすか霧深し
葡萄挽ぐあんぐりぼろり手にずしり
葡萄熟る自由放任低農薬
霧流るたちまち白き闇の中

落
合
森
理和

✽

朝顔の涌きでるやうに咲きのぼる
菰の束かかへて戻る俄農
み仏の在すかに白彼岸花
唄こぼる伝技芸天葛かつら
芒野の宅地となりて日の暮れる

新宿御苑

実の熟れて赤い木になる梅もどき
しなやかにすすき群なす秋の風
秋の空ビルは高さを競ひをり
秋の風波紋つぎつぎ玉藻池
木犀の金降りそそぐあたりかな

大 官 山 莊 慶 子

本 町 三 吉 成 美 代 子

✽

遺言書書けば書いたで白露かな
言ひ訳の先にある闇秋深し
こぼれ落ちんこぼれ落ちんと蓮の露
まなじりを逃げ出すやうに秋の蝶
海馬から前頭葉へ新走

鍋屋横丁

吉弘恭子

✽

波除で波音消ゆる雲の峰
麦秋やみな屋号ある村の家
海霧港烏賊釣船の続々と
秋の宿烏賊の刺身は天こ盛り
規則正しく蝉鳴いてをりビルはざま

宝仙寺前

鈴木多枝子

（九月号分）

十月作品より

王岩・佐藤喜孝

戦争中とは話し出す炎天下

鎌倉喜久恵

第二次世界大戦末期の一九四五年（昭和20年）八月6日午前8時15分に、アメリカ軍は広島市に対して世界最初の核兵器である原子爆弾を投下し、当時の広島市の人口35万人（推定）のうち約14万人をこの一発の原始爆弾で殺してしまった。四日後の九日午前11時02分にアメリカ軍は二発目の原始爆弾を長崎市に投下し、当時長崎市の人口24万人（推定）のうち約7万4千人を殺してしまった。この二発の原始爆弾が投下された一週間後の8月15日に、前日ボツダム宣言を受諾した日本政府は昭和天皇による玉音放送を以て日本が無条件降伏したことを国民に伝えた。これにより第二次世界大戦が終結した。

一九四五年八月十五日は蝉の鳴き已まぬ暑い一日だったという。来日後の最初の恩師であった鎌田茂雄先生のお話を聞いたことがあるが、その

日、ちょうど陸軍予科士官学校の学生であった先生は、炎天下の校庭で玉音放送を聞かれて、それまでに構築された価値観が音を立てて崩れていったとのこと。その後、先生は仏教の研究に没頭され、戦後日本を代表する仏教学者に成られた。8巻刊行予定の『中国仏教史』を東京大学出版会から1〜6巻出した所、ご逝去により未完で終わる。

掲句の作者もあの戦争を経験された方であろう。毎年暑い八月になると、「戦争中は」と色々と思いつく。映画や小説の中でしか戦争を知らない世代の私たちは幸せである。

葡萄棚金峰山は今日も雲巻けり

須賀敏子

金峰山を広辞苑で調べると、二か所にある山だと分かった。一は山梨県と長野県との境にある、関東山地西部の高峰。標高は二五九九メートル。一は奈良県吉野山奥千本から南は大峰に至る連峰。最高峰

は南端の山上ヶ岳。金の御岳。

掲句の金峰山は「葡萄棚」とあるので「一」の謂であろう。近頃、葡萄棚越しに金峰山が遠く見えてくる。今日も白雲の棚引く山容は美しい。

雨音の静まり俄蟬の声

森山のりこ

先から降り出した俄雨は小降りになると、今度は蟬時雨。今まで鳴き止んだ蟬たちはまるで息を吹き返すように一斉に鳴きはじめた。日本の夏の一齣である。

夕立や唐三彩の馬嘶く

木村茂登子

唐三彩は唐代の芸術品で、千年以上の歴史を持つ。唐代の陶器の釉薬の色は非常に多く、クリーム色、赤褐色、薄緑、深緑、藍色、紫などがある。中でも、クリーム色、緑、白の三色の組合せ、或いは、緑、赤褐色、藍の三色の組合せを主としていることから唐三彩と称されている。唐三彩の形状は非常に多く、人物、動物、器物の三種に分類される。人物には天子、文官、武将、貴婦人、下女などがある。

動物には馬、駱駝、牛、ライオン、虎などがある。

器具には文房具、壺、皿などがある。

唐三彩の動物としては、馬と駱駝が代表的である。とりわけ馬には多くの飾り金具で飾られた引き馬の姿が多い。現在、唐三彩の馬の複製品が売られている。

掲句の唐三彩の馬は自宅に置かれたものであるうか。或いは美術館などに置かれたものであろうか。雷を伴いながらの夕立の中、躍動感あふれる唐三彩の馬が嘶くかのような錯覚を起こした。

暑き日の銭湯ありて良き浮き世

遠藤 実

「じゅういかんがみ熟監るに、銭湯ほど捷徑をしへの教諭そのゆゑなるはなし。其故如何となれば、賢愚邪正貧福貴賤、湯あびを浴あびんとて裸形はだかになるは、天地自然の道理、釈迦も孔子も於三おさんも権助も、産れたますがたの容すがたにて、惜い欲いも西の海、さらりと無欲の形なり。」と書き出した式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』は江戸庶民の社交場であった銭湯を舞台に、そこに登場する男女の動作、会話を克明に

描写し、世相や庶民生活の実態を浮き彫りにした作品である。

掲句を読んで何故か『浮世風呂』を思い出す。蒸し暑い一日の終わりに、汗塗になった体を銭湯に浸したその時の実感は「暑き日の銭湯ありて良き浮き世」と詠ませたのである。
(以上王岩)

降り足りしにほやかな闇涼しかり

芝 尚子

“五風十雨”は「五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降ること、転じて、風雨その時を得て、農作上好都合で、天下泰平なこと。」とある。適当な雨は分かるが、風が農作業にどう関はるのかは知らない。雨は農作だけではなく大切なものである。今問題の八ッ場ダムも雨に関はることである。私は雨が好きである。つらつら考へると子供のころからである。雨が降ると校庭での体育の時間が潰れる。私には至上の喜び、遠足が中止になるより、大ごとだった。その影響かどうかわからないが、雨の日はおちつく。掲句から反れてしまったが、雨と一字も使はぬ雨の句もおもしろい。涼

やかな風が吹いてくる好句である。

走馬灯上野不忍肩車

森 理和

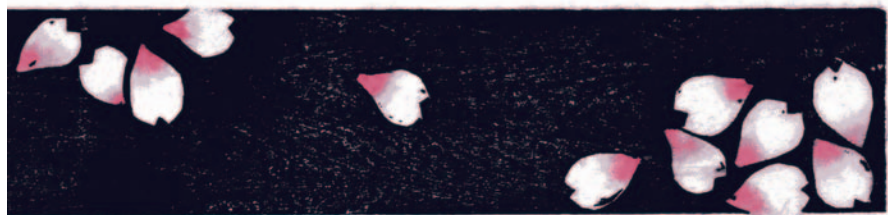
起き抜けの夢さめぬまま蓮の花
朝すずし動かぬ亀の喉うごく

も好句であつた。掲句は漢字だけといふ厳つい姿をしてゐるが、内容は優しい。上野不忍を肩車をされて歩いた幼少時の記憶があるのだらう。今不忍池に来て走馬灯のやうに浮かんできたものとおもふ。本来は眼前の走馬灯からの発想と読む方がよいのだらうが……。池畔に立つての回想句である。私が俳句を教へていただいた武井石艸先生の耳に遺つてゐる言葉の一つに、“普段作る俳句はどうでも良い。いざここ一番といふときに、しつかりとした句を作るやうに、普段から心掛けてゐなければならぬ。”と正確ではないだらうがこのやうに言はれた。表現したいものに出会ふ時、しつかりと表現できる作者の句歴を徒疎かに考へてはいけなとおもつた。

(以上喜孝)

翻車魚の動かぬと決め梅の雨
 梅雨さなか天井裏のねずみども
 奥嶺の日得てくろがねの葡萄垂る
 朝市や漬物桶に秋驟雨
 硝子越しとかげと猫のむきあへる
 弁天堂蓮の浮き葉の上にある
 菜園にトマト炸裂敗戦日
 夕立や唐三彩の馬嘶く
 早朝の地震そのあと台風来
 降り足りしにほやかな闇涼しかり
 日に一輪日に一輪と扶桑花

佐藤喜孝
 吉弘恭子
 渡邊友七
 赤座典子
 安部里子
 遠藤実
 鎌倉喜久恵
 木村茂登子
 篠田純子
 芝尚子
 芝宮須磨子



前月作品

今朝秋のポストの色が怪しからぬ	定梶じょう
葡萄棚金峰山は今日も雲捲けり	須賀敏子
青蚊帳を「燃えるゴミ」とし捨てにけり	竹内弘子
大台風近づく夜の盧遮那佛	田中藤穂
秋晴にシーツを白くして貰ふ	東亜未
揚羽蝶付かず離れずわれとゐる	長崎桂子
約束の如八月十五日晴	早崎泰江
分数ほめ朝顔日記手直しし	藤野寿子
久に訪ふ夏野の道を違へけり	森山のりこ
走馬灯上野不忍肩車	森理和
大亀のゆっくり沈む九月かな	吉成美代子

喜孝抄



近世俳諧と漢詩文 2 式拾四

王 岩

清き香の露一盃や菊の酒 元 隅

『続山井』に見える句で、『三体詩』に載る韓偓「野塘」の結句を翻案した部に、下五「菊の酒」を配した組み合わせである。

侵曉乗涼偶独来、
不因魚躍見萍開。
捲荷忽被微風触、
瀉下清香露一盃。

曉を侵し涼に乗じて 偶独り来る
魚の躍るに因らざれども 萍の開くを見る
捲荷 忽ち微風に触れられ
瀉下す 清香の露一盃

作者の元隅については詳しくは知らないが、「清き香の露一盃や菊の酒」から見れば、韓塘「野塘」を読んでいるにちがひなからう。漢詩中の蓮花は俳諧の中では菊花に置き換えられた。その菊花は清らかな香りの朝露を一盃に貯えている。文字通りの菊の酒である。「菊花酒令二人長寿一」（『西京雜記』三）とあるように、これを飲めば健康を保つことができる。

草の戸や日暮てくれし菊の酒
 草の戸の用意をかしや菊の酒
 小座敷や袖で拭ひし菊の酒
 鼻殿に盃さすや菊の酒
 菊の酒酌むや白衣は王摩詰
 菊の酒人の心をくみて酌
 売文は明日へまはして菊の酒

芭 蕉
 太 祇
 一 茶
 正岡 子規
 芥川龍之介
 星野 立子
 加藤 郁平



越中おむら 風の盆

赤座典子

風の盆とは二百十日の風封じと五穀豊穡を
祈って、三日三晩演舞を繰広げる伝統行事で富
山市八尾町で毎年九月一〜三日に開かれる。地
元の御宅に泊めて頂けるといってお誘いに、是非
にと我等夫婦も参加させて頂いた。

前日の八月三十一日、まず八尾を案内して頂



く。坂の多い石畳の町は十一に分れていて、そこかしこが路次に繋がっている。軒にはそれぞれの町特有の色鮮やかな幔幕が張られ、房や帯が中心に結ばれている。華やかで格調高い家並みである。

公民館を幾つか見て廻る。踊り手は、二十五才迄で未婚の男女と決まっているそうで、茶髪やピアスの若者も混り、和やかな練習風景であった。

初日の九月一日は、前夜の雨も上って一安心。午後の町は今年も例年通り二十万人という観光客で溢れていた。

狭い通り一杯に練歩く踊り手と地方衆。編笠の下、見えるのは頤だけ。町毎の浴衣と黒羽二重の法被を着て、皆きりりとしなやかである。一箇所長い間踊ったり、子供達が先頭に行進

したりと、十分に堪能できた。

夕食に一端帰宅、一眠りして午前一時頃再び町へ。通りは人がそろそろ歩く程に減っていた。ぼんぼりの明りだけの路地を唄の聞こえる方へと辿ると、流しの一団に出会う。

この時間になると笠を着けていないので、踊り手の若々しい顔が、結び上げられた髪や、反った指先が、ぼんやりと浮かび上る。

夜の静寂に流れる地方衆の演奏には、心に沁み入る独特の情緒があった。通りの縁台で時を忘れ聞き惚れていた。胡弓と三味線と低い唄声が、踊を先頭に緩やかにそれぞれの町へ帰って行く。全ての音が消え、町を後にした時は、四時を過ぎていた。

棚田の天辺の家へ戻ると、満天の星が迎えてくれた。素晴らしい経験をさせて頂き感謝！



あをかき集

堀内一郎選

(六人目以降五十音順)



鎌倉喜久恵

東 亜 未

吉弘 恭子

遠藤 実

底紅や指入れて児の笑ひ居り

芝 尚子

赤とんぼ風に逆ひては流れ

コーヒーの一杯分をしぐれけり

干柿や猫うら返る日の光

どんぐりの轉がりたがるひとところ

虫の秋何か買はねばさみしくて

秋日濃しすだれの筋の移りけり

朝毎に落葉の嵩の高くなり

休耕田尾花の波にかこまれて

母あらば月見の客を招きけむ

秋の燈やずつしり眠る子供抱く

秋晴や山頂走る子追ふ砂煙

花トネル萩の斑の顔笑ふ

リフトから秋の夕焼谷深し

秋の蚊の侮りがたき痒さかな

勿来から白河関へ櫻散る

空梅雨や白波遠く佐渡ヶ島

たまゆらの白玉椿こぼれ落つ

祝酒地白にひとつ梅雨の跳ね

苔の階白河楽翁踏みはづす

秋簾外に置かれし煙草盆

秋の空左翼にかぶれた我が青春

合気道看板厳めし猫じやらし

酒のめぬで通した世渡り葉鶏頭

山門の阿吽銀杏落しけり

一枚の初紅葉して傳茶房

歩みきて文学館へ秋日傘

立居して骨の音する露の夜

紅萩や一人の家の雨戸鎖す

柿の実を落して鴉立ち去りぬ

長き土手寂しくなりぬ秋燕

久々に浅間見えたり秋澄める

垣根ごし触れむばかりの青蜜柑

馬肥ゆる乗馬レッスン風の子等

あきつ島待てば海路に鳩あきつ

秋燈下デジタル案内総務省

紅葉酒福耳遺伝いとこ会

観覧車秋の夜空をほしいまま

打菓子の色とりどりに菊づくし

秋暑し空地に残る水道管

テノールの響き何処まで秋の空

田中 藤穂

早崎 泰江

藤野 寿子

森山のりこ

桐の実の母の日課の独り言

葡萄熟る笑みの溢るるカフェの客

庭に生る大水青に金縛り

流れ星いとしい象の死亡記事

少年の声つきぬけて秋萩

ピストルの音の歓声秋高し

タクト振る少年眩し天高く

遠ざかる単線電車黄葉燃ゆ

秋彼岸入谷に残る鰹節屋

初栗の薄き甘さを愛でにけり

おろおろと柿挽ぐ人を支へをり

桐一葉天下の秋は変るのか

天高く五重塔は揺れてをり

滴滴の雫をもとに秋の川

格好の石とはみしが秋の冷え

新蕎麦や天ざる一枚では足りず

孫生れて夫若返る赤とんぼ

まっすぐに血液すすむ九月かな

森 理和

吉成美代子

赤座 典子

木村茂登子

篠田 純子

抜け殻も落蟬もみな土となる

蟬蛻追ふ猫の目猫の手猫の口

老人は御神酒所守り秋祭

その昔暮らした家の石榴の実

露天風呂老どち四人夏惜しむ

待ちつかれ乗り合ふバスに濃い竜胆

水引の細かな花の強かな

新米も例年並と達筆で

ほつほつと桜黄葉落つ九月

茶畑を賑やかにして秋桜

父の命日赤飯炊いてしまひけり

赤信号長しとおもふ残暑かな

老の身も更衣してときめきぬ

玫瑰やオホーツクの海に足濡らす

烏賊舟や永きたそがれ経て灯る

緑蔭に片方落ちてゐるピアス

海坂に夕日どっしり蚊喰鳥

はさまうかつつづくべきか八つ頭

芝宮須磨子

須賀 敏子

鈴木多枝子

定梶じょう

秋彼岸夫に賜りしに合掌

秋涼の石鹼の香に浸りをり

醉芙蓉ランチに早も御機嫌に

街路樹のささめき揺れる秋の色

長崎 桂子

一句燦々

底紅や指入れて児の笑ひ居り

尚子

私としても底紅は始めて、女性を感じ母を感じてくる。嬰兒が母親にあやされているように木槿では、この色は出まい。笑ひの幸せ感は作者に、そして多くの読者に伝わってゆく。作者の成せる技であり、ひかえめながら快い。自在さ。作者は動くものに、執心その意は。

虫の秋何か買はねばさみしくて 喜久恵

デパートなど安売りセールでどつと押しよせるテレビ画面、激しく勇ましい。その反面の淋しさを、この作品は物語る。これで欲求不満が解消できればそれで良し。まさに虫の秋、男とて同然デパ地下にて小買物。

秋の燈やずつしり眠る子供抱く

東亜未

ずつしり、は生命の重量充実感である。子供の夢を抱いて無心恍惚境の一と刻は得がたい環境の恵みとも、灯を燈としたのは、その強調と思う。作者の視界の広さ明るさは羨ましい限り。

勿来から白河関へ櫻散る

恭子

白一色これも、お勉強。昔は読み込みと言って旧派を馬鹿にしていたが最近は流行っている。

作者の求める世界は濁りのない一途さと思う。白河が出てきて嬉しい。白河では昭和二十年早春徴兵検査をうけた。戦後は疎開地で何度か南湖の花見に

トラックで出掛けたものだ。白河関には加藤楸邨句碑もあり勿来には源義家の歌碑もあり下も手に角川源義句碑も眠っている。楽翁は白河藩主、松平定信。櫻散る。こぼれ落つ。白波に移り変わる世の果敢さを感じる

秋簾外に置かれし煙草盆

実

古風蒼然の中に生活が脈打ってどつしりと根を下ろす。煙草盆も年月を語り、秋簾と往還して主役を演じている。最近のケバケバしいものより、この渋さ加減が新鮮に感じるようになってきた。合気道では植芝盛平様と昭和二十五年に出会い今でもお得意様。先年旅行したときお墓参りをしてきた。

一枚の初紅葉して傳茶房

藤穂

ご挨拶句だが、思いの代弁を初紅葉に託しているようにも思える。私の一人よがりかも知れぬが、一枚に注目も下五の響きも弾み格別。「歩みきて文学

館へ秋日傘」の文学館は俳人協会であろう。秋日傘に楚々たる淑女を感じる。

柿の実を落して鴉立ち去りぬ

泰江

無心のカラスその後啄みに来る算段と見た。すぐに家主がちゃっかり頂いたかも、生存競争の世の中である。政治の行方にもつながって。

馬肥ゆる乗馬レッスン風の子等

寿子

食欲の秋で作者は十分に健康そう。風の子に思わず手を打ちたくなる。馬を重ねたのは俳諧のつもりらしい。「あきつ島待てば海路に鳩あきつ」のあきつの重ねも待てば海路に日和あり中々のものだ。

観覧車秋の夜空をほしいまま

のりこ

ありふれた景であるが、それが妙にいい。ありのまの姿を新鮮に感じた作者の心根に突き当たるのであろう。人の心情に触れる醍醐味が俳句中毒

になる所以である。

桐の実の母の日課の独り言

理和

「の」が四つ多過ぎるが、この作には必要なくどさなのであろう。独り言は老化現象であり誰をも襲う。母の始終を見守って居る作者の神経も容易ではない。うちの家内も独り言があるので注意している。他人事ではない老齡化時代。

「傳」へご無沙汰、葬祭場の帰り掛けに寄るのは失礼と思っている。そのうち時間を見て句会へ。

少年の声つきぬけて秋桜

美代子

秋になると小、中学校で遠足もある。町にそんな彩りを見せる。声を出す処から小学生のグループと思う。何時も囲まれた生活からコスモス平原へ小学生ならずとも呼びたくなる。「つきぬけて」K音の躓きが気になるので「つつぬけに」にしても。

秋彼岸入谷に残る鯉節屋

典子

入谷では永い間、編集会議があったのでなつかしい。

朝顔市があるので私も一年に一度は行く。横丁へ入ればこのような老舗があるに相違ない。この作が古さを感じさせないのは何でも新しくなれば良いと言う流れの中の安堵感である。

天高く五重塔は揺れてをり

茂登子

塔は天上を目指すもの。済みきった空へそそる颯爽感は塔自体も快しと、作者は思ったのである。作者も五重塔になりきっている。

揺れざるものを揺れると妄想するのも詩人の目である。

孫生れて夫若返る赤とんぼ

純子

喜びは格別であろう。夫にかこつけて、ご自分も

その気になる。赤んぼと赤とんぼの符号もよろしく目出たい一句。「蟬蛻追ふ猫の目猫の手猫の口」は遊びすぎ。作者は理知的の反面、もの凄く純真さを見せて呉れる。その落差が天才的素質の部分でもある。

老人は御神酒所守り秋祭

須磨子

“長老” としての処、老人のへりくだりは自身も含めての言であろう。何処の祭礼でも年寄が溜まっている。私もそのひとり。奉納、寄付など半紙に書上げやローソクの火の番など頼みになる。若い者はそれぞれ事情あり。

水引の細かな花の強かな

敏子

山路を行くとよく見掛ける。小振りながら紅を誇って美しいと言うより作者の言う力強さである。私にも一句だけはあるが、その後突き当たらない。祝いに結びつけるのは、あの自己主張の目出たさで

と思う。季の重複した句もあるのでご用心。

父の命日赤飯炊いてしまひけり

多枝子

なにかの都合でお赤飯を炊いた。炊きあがつてふと父の命日であったことに気が付いた。しまったと言ふより作者は可笑しくなったのであろう。しまひけり”に読むものも微笑がわく。

烏賊舟や永きたそがれ経てともの

じょう

テレビ画面では見るが、茫洋たる海の黄昏は見事であろう。一日一日が大事になってくると思いは一人である。「永きたそがれ」が時間的経過を語り灯りは即作者の火に

秋彼岸夫に賜りしに合掌

桂子

さり気なさに驚く。賜りものは申さずとも只事ではない一句である。合掌と潔く切ってこみ上げるものがあり、生命の果敢さか。

あを吟行会のお知らせ

十二月 千駄木界限

集合地 千代田線「根津」

日時 12月19日(土) 午前11時

昼食 昼食(句会場) TAVOLA

文京区千駄木 3・1・17

電話 03・3822・8408

申込み〆切 12月8日

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

コースはおおよそ左記の予定です。ご案内は芝尚子さんをお願いしています。

根津 ↓ 妙情寺 ↓ 大名時計博物館 ↓ 根津神社

↓ 藪下通り ↓ 句会場

「藪下の道」は司馬遼太郎の他、永井荷風「日和下駄」、木下順二が「本郷」、森まゆみが「鵜外の坂」等で多くの作家に書かれています。

秋櫻の巻

秋櫻浅間山裾揺り返す

頂にあり暈被る月

草ひばりかくれんぼうの足見えて

かへるかへると手をつなぎたる

幾つもの橋をくぐりて夕あかり

舟頭端唄口三味線

機長より気流良好レモン水

日向の椰子を見上ぐる日傘

手づくりのジャムとクッキーリボンかけ

度肝抜かるる大胆な服

脹脛引つ掻き傷の見え隠れ

花束そつと後手のもつ

海べりの観覧車から冬の虹

雪嶺よりも白くある月

からつぼのバスに乗りかへ母の郷

道路広々開発進む

花簪扇かざせるをとこ舞

名残雪踏むをぐらきところ

起首 二〇〇八年十月一日 於中野坂上「ジョナサン」

唐網

不寝

音々

竹洗

糸つ

唐網

不寝

音々

唐網

不寝

音々

唐網

不寝

竹洗

音々

糸つ

不寝

竹洗



春の猫しきりに体なめまはし

大谷石塀ほろほろくずれ

をさな子の遊び果てたる座布団に

家ぬちまでも日の回りきし

ご隠居の立ち居のみゆる扇風機

浴衣の紐をむすびなほして

このへんと心に決めて紅花緒

メールして待つもんじや屋の隅

外灯も更けゆく街をオートバイ

海のぞめきにいざなはれゆく

二日月くるりくると風見鶏

いてふさくらと色づきはじむ

「渋柿」の書は漱石の題字にて

甘がみゆるす留守居の縁に

小学生ふくささばきを温習をり

盆の干菓子のかたちさまさま

かんばせにふるるひとへの花の枝

岬の果の薄霞して

ゑつ

音々

不寝

竹洗

波

音々

竹洗

波

音々

竹洗

波

音々

もも

音々

ゑつ

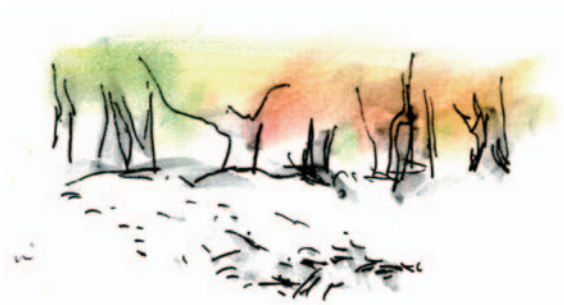
もも

音々

ゑつ

満尾

二〇〇九年八月九日 於中野坂上「ジョナサン」



あを柳集

兼題
仮

佐藤喜孝
選

仮の世をどんぐりころころいとこ会
常にある仮想敵国とろろ汁
かの仮面父かもしれぬ盆踊
看護衣のまま新涼の仮眠室
秋の風仮設住宅の台所

仮の世をどんぐりころろいとこ会

「仮」は発想がひろがりにくい題でした。特に「仮の世」などは難しいと思ひました。が、この句は臭みを抜いた面白い句でした。評言に「面白い」と使ふのは気が引けるのですが、

常にある仮想敵国とろろ汁

本当に仮想敵国は常にあると思へば常にあるものだ。人間の弱点であらう。とろろ汁一言で俳諧になる季語のありがたさ。

かの仮面父かもしれぬ盆踊

佃島の盆踊を見た時、たしか動物の面を被った人がゐた。仮面を付けて踊るのを亡者踊といふさうだ。仕草がどこか亡き父に似てゐたであらう。

看護衣のまま新涼の仮眠室

働くもののすこやかな眠り。新涼は看護士への感謝の言葉。

秋の風仮設住宅の台所

自然災害に遭遇しやむを得ず仮設住宅で暮す人が毎年生まれる。一家団欒の食事を作る場である台所。秋風の吹くやうになると冬の厳しさが思はれるのである。

秋麗や仮設厭はぬ名人芸

東 亜 未

月今宵仮に美人に生まれなば

篠田 純子

仮縫ひの袖付け攣れる屋の虫

仮の世の終の棲家の掛布団

仮小屋を談笑洩れて茸山

田中 藤穂

仮初のえにしなりしよとろろ飯

仮の世の年寄の日の祝金

仮の世をどんぐりころころいとこ会

藤野 寿子

仮の世をせっせっせと生身魂

一徹の仮寝の男新ばしり

早稲の香や野口雨情の仮の宿

竹内 弘子

仮病とも風邪とも見ゆるマスクかな

かりそめの生の果に小鳥来る

はたて



常にある仮想敵国とろろ汁

仮の世にまた糸瓜忌のめぐり来る

あの釘は蚊帳釣りしなり仮寓して

かの仮面父かもしれぬ盆踊

巡視船仮泊す鱗雲の下

まぜ書きの仮名をさびしむ秋燈し

一茶忌の仮の世ながらさりながら

クローバやかりそめに置く鬼瓦

仮名文字のたひらな便り夜長かな

仮縫や秋の表彰気恥かし

看護衣のまま新涼の仮眠室

「須可捨焉乎」^{すてつちまをか}は万葉仮名か垂乳根の

歩ききて白詰草に仮睡かな

定梶じょう

長崎 桂子

木村茂登子

吉弘 恭子



金秋や仮歯はなれぬチューインガム

深酒や仮寝をさそふ月の夜

初秋や五七五の仮名づかひ

うわんうわんと仮家の庭にくずかづら

仮庵の水のゆがみに蝶蜻蛉

秋の風仮設住宅の台所

仮病せる頃懷しむ昼の虫

仮初の人例ふれば竹夫人

相聞のひとつやふたつ假の世ぞ

假の世に蒲團を延べてこの世とす

二十日月仮初人の數語はも

森 理和

佐藤 喜孝

(投句数 五十一句)

第六回11月×「飯」 第七回12月×「坂」

九月の句会

傳 中野区 カフェ傳

蓮池のなかほどざわざわしてをりぬ 綾子
平仮名でさらにやさしく秋の草 茂登子
こぼれ落ちんこぼれ落ちんと蓮の露 恭子
魂棚に呟きて燭ゆるがする 弘子
指一本海に触れずに夏終る 寒林
竿燈を支へて動くのどぼとけ 敦子
裏返るかなぶん不運といふべかり 綾子
落蟬の何で天向く七日かな 実子
源氏読む一匹の蚊にまつはられ 藤穂
秋湿り今日は夕日を見たりけり 美代子
壳声もかすれアメ横秋暑し 寿子
ありし日の母の針箱秋の風 喜久恵
ヤキトリ屋から出てきたやうな黒揚羽 喜孝
海の家大事に解かれ新松子 理和

あを吟行会 上野蓮見

休会

調句会 浦和岸町公民館

東京に古墳いくつも曼珠沙華 藤穂
遊美園てふ老人ホーム鶏頭咲く 泰江
仏像の在すかに白彼岸花 慶子
指入れて土の冷たし蟬の穴 敦子
枝折戸の開いてゐたり実むらさき 綾子
馬肥ゆる乗馬レッスン無料の日 寿子
秋の蛇消えし辺りの水多くば 弘子

七座句会 中野区・小川苑

風落ちて水にひろぐる九月かな 木枯
ひたむきと言ふは切なし秋海棠 綾子
遠き日の月を重ねてけふの月 尚子
言海のずしりと重し秋めきぬ 藤穂
蟋蟀追ふ猫の目猫の手猫の口 純子
秋の草寄せ植ゑにして美人果舗 須磨子
コスモスに溺れ善意にも溺れ 夏子
赤信号長しと思ふ残暑かな 多枝子
鰯雲海にひれ伏し待つサーファー 理和
ひとりごとと言ふこともなしちろ虫 房代
遺言書書けば書いたで菊香る 恭子
鰯雲じつと待ちをる瓦屋根 東亜未

連句勉強会 毎月第2日曜
出席希望の方は連絡を
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3611)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 古弘恭子
(090-9839-3943)

表紙は箱根強羅で。風の強い寒い日であつた。遠来のミャンマーのロック歌手のご一行に蹤いていつた。希望がお城と湖に写る富士山で日帰り。芦ノ湖とすぐ決まつた。とはいへ小田原城には、何に興味があるのか長くゐて予定が狂つた。まだ元氣であつた象の梅子さんの前で男性は鎧姿、女性是一道中姿で嬉々と写真を撮つてゐた。昼食は日本蕎麦、美味しかつたのだらうか？聞きそびれてしまつた。富士山は強風のため良く見えたが、ロープウェイが止まりさうで心配した。マイクロバスの運転手が氣を利かせて夜の富士山を見せてくれた。裾野に煌めく灯が印象的であつた。夜は新宿で歓談を尽くす。ミャンマー人も日本人も満足した一日になつた。

メールで連句を始めます。希望者はその旨を左記アドレスまでメールして下さい。私との両吟になります。未経験者でも（私も初心者）大丈夫です。百聞は一見にしかず、体験することで俳句への理解も深まります。

haisi@kagoya.net

二〇〇九年十一月号

発行日

十一月五日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝
竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

郵便振替

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

00130・655526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えます。

